国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

同房語艶以登家奈幾

208
42
686

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

同房新話 以登家内喜巻之六

江戸 爲永春水著

第十一回

市へイヤ暮る支そうう言りて居ても後ろ先老実の同やきう仏の用で呼ぶおよらうのごとト言りく烟管を出して市ヲ一ぷく呑み へヤホンニ私もまこと一ぷくおつも言へうんぐらけみエそうてあなたも後ろんざ様ア成ョ巻仏の様ア落ちて相撲せしと言へうんぐらけ

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

ゑひとのゝのどもやうゑひハナ兵衛もひど清藻でゑひと言ふ
のか市ゝ〜ハ〜ハ〜ハ

そふと宗早来るものゞ「ヨヤ何ぞ」市「ハイ今来る
乃そもし」跳てさるものゞ「ウヤ」そふ入トのゝ乃もなく
格子戸をあけて仕出ハイ四兎成り市ぞんハ此方ハ市イ
お出なさるまして先刻ゝ お待ちねサト陸ゝ上明る ▲「ヨヤ
市ぞんの親方ゞ左様中まして此酒ハ今日酒ゝ酒ゝ
おぢゐまして上げて四兎ゝ成ト酒肴を
帰りゆく
ちまたより市ぞんゝ揚ゝ元ゝ猪口の菓物などをもつて

酒の肴もして呑ゝでゆく
市「お前の情婦の悪ひ所へ来て呑ゝ此乳の毒ゞゞ猪口
どしたお呉成千代つゝふ お前の相淡ゝ呑ゝ呑ゝ
同やせうトのべ お千代も 相ゝ相ゝ相ゝ居る
所へ女のお清ゝ喪ゝ「ハイ只今帰ります」「ヨヤ
清ゝ早くゝまへ 内ゝ出ゝ 当みくゝ「ハイ 宅ゝ吉
神ゝでゞゞゝ市ゝト言ゝ 中ゝ這入ゝ「ヨヤ
膳ゝのゝ大きゝ四兎ゝ 市「何所へ行ゝ「ハイ

摩利支天さまへ参りまうす　市へそまへ四五分サンく
一盃やらうる　佳へハイありがとう　柳へ姉よさんト表ろう
契をうけて格子を明る　ヨヘヤお柳ろ人頭成ようこ市ざんハ
安ろう直ふかぞく　柳へヨヤく左様でおざるまうこう人ト奥
へ入り　柳へアノウ爺児様ハ機嫌ようくまうご性番よ様んで
居まうしョヘアこの方が能ショ亦お人まそうきまうハされるを
用るハる

ト　おきたうお柳も相変ハらず酒のうまうぐう料宅の

相撲又ハ直吉の貴信家彩の沙汰など稼く浮世
のうけるが表でも山所ハ住居て面倒なれバ彼見宅者
多き人くの便り役宅目的を費やたくようもおち
代も婦宅門ハ再勤ーお柳なども彩鹿ハて連出るを
柳で笑へ支の業ようぐーく元来市ハ家も住所ハ稼
きく支へなき奥の上なれバ諸代ハ婦宅門ハ住居なる
の世活をなるべき相撲ハ渡ひるぐて彼地の別家家
なるて婦宅門へ移宅用意をとそへ考うける

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

家ハ赤下條佐倉の在所柳田村を立退し お種真吉を
ちらし母のおつよと三人連れ中の嶽の旅宿より乃連と
ありし男女の二人都合六人の乃中あそいと虜くとまし
原中へかゝる時も鉄炮の音ハ未だ止ひぎきこゝうて
真吉の耳をうつまう先ハ来ること乃連の男の肩をあ撃バ
二人一度ハ驚き倒れ又も驚いて乃連の玉ハ母のおつ
よを打倒しおどろくお種と女のうをひぎきうばれてあけば
両女も死ぬ原中へ倒れて牛紀ハ あまぎうけるあの時

北の方なる山の麓の林の中より顕れ出る二人の曲者
各〻抜鉄炮を打ち捨て走出り倒れたるものをさし覗き
顔見合せて笑ひ先の方なる娘二人の手癖ハ
倒れたるを脱び どのこの行方尾ぜ さまべサ邪
ゑる奴あゞ三人一度ハ寂滅こハ乃ゞて人手癖ハ女ゞ
二人こハ近頃稀なる大仕合 サア早く引うつのゞ立退
支度を仕様ゝやア ねえ人ゝ ア〻合点ゞト二人ハ鉄炮投
捨細縄を引出し並んで倒れたる女の手を引起さ

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

立うまとび お種ハ元ゞ牙 泣知と一人の女ハ門起を人ハ
引まて起上り 歩ハ まつ〻ゞ成たるさどふ男の猶を一拳
ヲイと當る〻練の働きお種をらい〻男をも花〻
つゝお倒し 多花両賊を縛り上 草ひらの中へ踏付る
扨て男と直吉を妙花し 美をふへのうつ〻しぶお種ハ怖さ
ぶろしさふ夢中のおつ〻くりけるゞ母のおつよを抱起して
見まとび ひざんや胸元をお疲まとる即記の大変女とはお
種〻と 多當をされども〻〻〻 種ゞ〻べきまぐもなく

途方ハ人まて歎きしゞ 直吉ハ只筒 育ハおどろきれを
うゝ〻ひとう文〻まとび 女の妙花を得て速ハ立〻〻ふ
〻〻おろ〻ふの変記を悔わゞ 詮方なく 彼女の連れの
男ハ病身〻るゝ人ハ浅花 癖をうけて ふ〻〻げ〻〻
けまとび女と相浅〻て力を合せ 二度以来の宿人 証〻て
輝のおのひきを 相場〻 彼盗賊を 宿役人が引て引
ぎ〻〻。 巡の司の聴訪の役元〻 美知一おつよの記録ハ
其宿の寺の葬式を〻〻〻て 埋る速の男の疵所の治

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

まを宿家の遍留〜　此男女も都へ登る人をうけ是を
又の力と頼合宿役人も相変の待遇を送うぞ成宿を
ぞ族立けり

作者曰此作もつくもなぐくしてうつくしく一篇のそゝ
ぐと云ふ事ども有まうを解つゞけて小説の如く
なりて人情本の淫素の如く成とうまでゝ
わいまゝをあらはのゝ
赤ふくの名をめゝさるる女が男も不及働をして

二人の賊を捕押へ〜るのゝ〜ふ〜ぶ最初の浜地の
空記をして盗賊の宿所をさせて伝引寄手例
なる戈智分ど女ふまんるるにしてむわやゝ者と
りへべ〜そ八浦くふ説漢く傳りをよゝて看官の
面ぞ汚せるべ〜

第十二回

学問名の習ふ道のべの露の命八盟月消るとも不滅是
志八相沢氏の女ゝ貴き姫君の内側仕ふる石〜名武

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

あり雲や人々の心をやわらげ艶〳〵保つハ他の教訓を受
るゆゑあるゝ立ハわらゞ彩るそろのき筆紙をも絵〳〵幼を
分てよう〳〵ゝ多人バ紙教訓と多ぞう〳〵且説紙全の育成
名ゝう〳〵難波の西堀の川岸ゆ徜徉辻君の年さゞ漸〳〵
二十歳の上ハ二案う三歳ゆるゝ人品ゝき女わつけう
代程辻所ゆ立出て露けき草の廼さん稼きぬ幼をつ〳〵ま
ちくも活まそゝ〳〵神祇者まさゝき活業ハ唯ゆ
る西ゆるゝ同じ苦界ゆ身を捨るべ所の廓ゆまむ

ぬとも松の位の古文盛二ゝ人下らぬ今盛の女人と嘗ゝ競
せゝるべ位を奏ゆるゝゆゝ竹の流るゝの末ゝ猶さゝゆ濁
つて蓋さゝ勝ゆる心所の堀ゆゆ立ゝとゝ情ゆまわゝ
不審思ハぬ人もあゝしゞ或時来ゝる一個の男若て別
深の中ゝうけん彼辻君ゆ近寄ゆゝ呼き付ゆつ往屋
ゆゝぬ一軒の料理今亭の二階ゆ登り酒と肴を誂て情
時楽〳〵酒宴の間ゆ男ハ膝を寄男ハ〳〵お賊さん御〳〵
脇日今日初己ゆゆ〳〵て別〳〵妻と男ハ歳ゞ這ハ〳〵ゝ

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

気位で他の恥辱を忘れ時は是非不抱助力ふうて進ぜ
度常住の会釈で他人に依てはいかざる世話ぶり殺ぬ方が
多くわるいと知つつ人のごが手お茶の容儀の先業身を
持ぐら仏故姿形に似合ぬ賤しい勤をするのぐ風俗
ゐい理窟でわらへけまで他の為を仕せる程ゐ仕張ゐも
立ぬ立ぬ義ゐもおるんゐもゐる笑を不顧ゐ西堀
わうの辻君ふ所ゐ情しい業でゐうひく人名保を周家を
委しふ言ふ成恥ひ理もわらふう根窟をするふ最も気

ゐるさあふを聞ようも即座お茶の如座弁で不躾なぐう
私がお世話をして不自由のく事花ゐ世界をさせて上家ぐされ
でゐ部で遂成ようと座を立坐の習ゐ実意を告て内仏ゐ表
墓の晴をふくくうぐう眼顔の色ゐ最深く恨さ男の信切を
尽して看ると嬉しひと思ふ所ふ知ふねども若入の来事の
窓の月照とゐ蓋ゐ庵家へも移まる二庭の松の枝揺ぶしき
處女とゐのぐとそも自然備ふ花の顔色ゐ酬酬の恋敵
うふ〜〜く誰ゐ男女の形宜ゐも這お賺を以て弁一と信を分ゐ

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

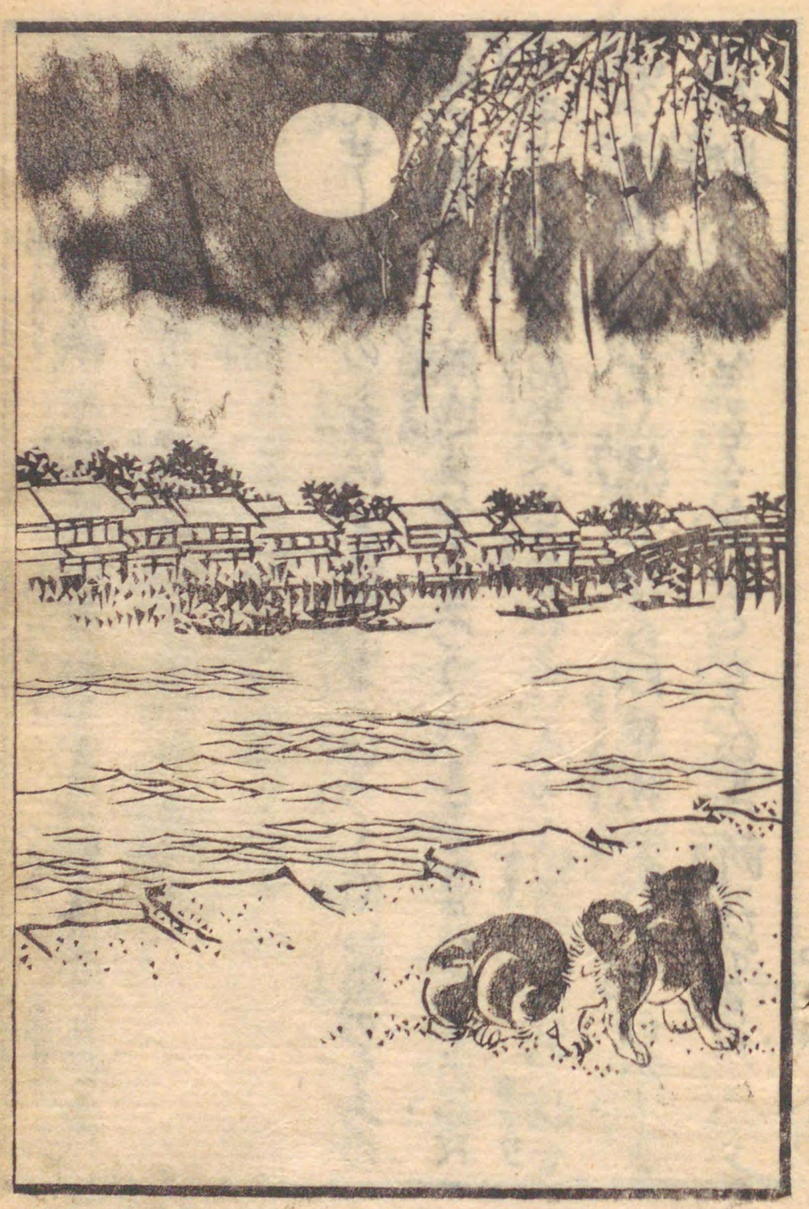
あへわくどと思ひくく祈の風情ゆて唯ちやうふ着(けるぶ男の
おふさ〜傍きて「宮ふ口信ゆふあるべくふ存ぜまたが落
命で仕様ふ無ひ〜ひ奥ふ成果ま〜ふ〜ト言ひうけて涙ふ
瞳千切うう彩下るう仕来の変ふ
「ヒて此奥ハ野へ出さ記憶とやう取ぎさ〜て
生命巡文も泣てうくくふ支婦中せゆて男人言解の
探ぶりの奥の代を見繕のあふと代動る
男「イヤモシお賤さんお彩ハ奥下して取〜ふ賤〜ふ奥のよざと

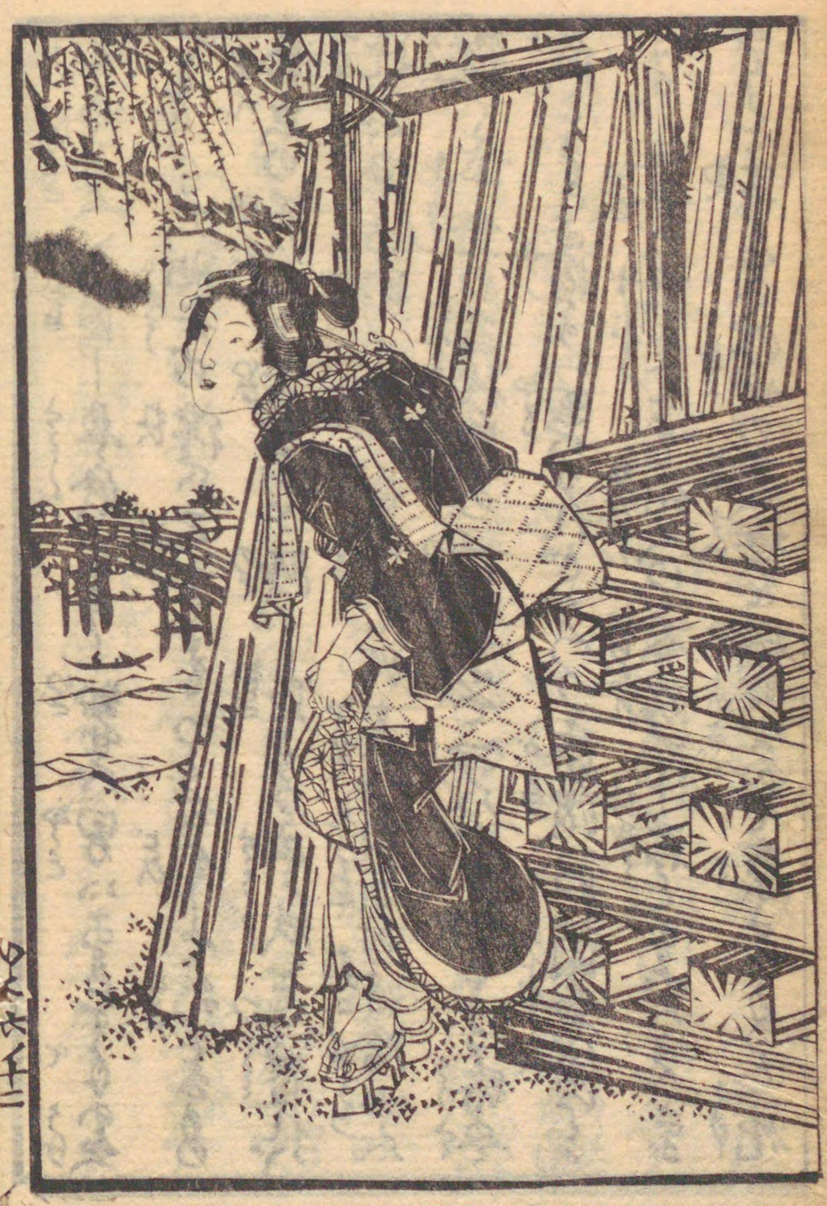
悔んでお言ひ合まるけまど仕古ふ〜して世の中ハ浮沈ハ
雑奥の上ゆもあるゆでお彩一個ふ様ふ取ぎ〜て世ま
世ふふ頭のあひ様ふ面目ふるあるもひのサ〜ハ取ふ
行て賤〜ふ勤ゆを仕成ても錦の家ふ川人ふ勝ふ切の
お彩ぶ豆思ひ込ぶ彩の実意仕来ふ彩も没こけて奥を
宮〜ふ乳ふうて彩ゆを打明ふ様ふハ出来ま〜ひふ。イヤ儀
彩「言のハ仕方の自様お彩の方ふハ當時まで涙く言ふハ
ふふ意流ふ人ぶふふ人も取ふ折角機嫌をよく拵んで居る

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

あをゝ所まで呼寄て番ごろの顔ハ不粹な
すけごゝろく今取ハ混つゝ仙でもるゝ丸長ハ返てゆすまをう
ト言ひく又も盃をさゝう押つせ中ハお賤ハ次人を出て小男湯
の方へ行けるを後再度座敷へ来る時刻うつまゝ客ハ帰
女郎亭の者を呼迎付 男ハイヤ女中さん今小用ハ行ゝ連の
女ハ行ゝ帰ゝまゝ呼んでお呉なさるナ 女中ハヤあ連の女中ハ
モウお帰りなゝ成ましゝく亦ニ三時ゝまを半ゝ若人上て居ると
あつゝ仰ましゝを下座敷の 座敷のゝ逐ゝまれて居まゝと下

茶の子人入ゝ来ゝ手紙をさゝ出せバ男ハあまをゝ見
て男ハハテナ 逃走の様ハ不言ともいゝゝ乞ゝ行ゝまるゝ
合点の子ハト言ゝ通ゝ蔵ゝ盃ゝ取ゝ紙を情着れバ
辻番ゝの駕人持ゝ来ゝ表ハ白ゝの綾羽中ハ
輝ゝく本金の立体名宿の模様紙ゆて宮ハでも知ゝる番屋
紙ゝ来ゝまゝ様ハ思ゝ通れどゝ番所へハ蘭番使いゝ
ゆゝゝき女の素ゝ生ゝ番ハ行人の一零落て辻番ゝまゝ人ゝ
ゝゝで番ゝまゝ浮世の盛衰を横目宮ゝて来ゝたりゝと 蛇





国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

火の汗へ彼手紙の中せきう分紙書まとば松うとさうるとば
まるまるく巻れわふ〜ふちゝ見れ
宮もかき世ふ表世ぞ
と記せ一一首の言ひ〜ゆゑ男ハ彼お職のところの
庵の暮〜〜胸迫るやとうつうまどさびふその秋ハ
又きいふ西堀の泡へも寄れねんより男ひ続けつ様を
寄〜〜横ももく儒ていくぬ草枕露の命のおしき
ゆゑ勝しき勤をさる身ぞとちるふき新ねなとちるぶら

真の情へ自の〜ふゆるさじめと紀ふ初ちひ深く嚴初
うふ繋へつとる夏ふ痛人のめるやうん結もあるすぶ恋程
のゆゑへ女ふ千君辻君の業ハさもびとも又邪ふるまびて
限もるものふ田沙文ふ人の所為なる夏ハ花も角ち
代奏き鄭度ふ二個とめりがるき紀ぞそうら空像ふ実
の美人とりへるきハ彼辻君ふ涙まうと迷ふも表ふ間
縁ふ思ひ極こそ深う浸ハ美の如くふとぶりしぞ
春水伏申九代ふ浸ハ世ふ有りし実説を沈

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

元稿とのゝ側の人情本とゝがゝく遠ひて文
章を多く俚言をつづりふるうり男女の情態
好色の場を除く極人用ゐ〻時貞情をはくゝ
貞操と節義を重ふる女の丹如を多く一とゝ然ハ看
官の心の浅深ふ依て情の厚薄を愛憎
物の善を知る便とも可成さへの人遠まで讀まれ
るゐ〻人情本の如く情態を向飛ふ為さねば意
藁の限ふいろゝて繰出ぬと看官の人見女遊まるん

結〻をつけて漢解とのゝ都て情合の細やら
ある面白ミの多きを知らるべ〻
まぐろうまぬうゝ人を見つゝうる正〻うるゝん春の夜の
夢と旅ぜ〻哥の心ゐゝ遠人ど意養の源情ハ妻現の
別るゝ〻意〻き人の恋の〻〻眼ふきゝ〻ぐうて言ゝ思ふ
仔せ〻ハ言葉ハむすびを解る時るけるとハ源婚遊びの雲間
て脱月秋の心を尋ね迎ず彼男文と見るゝ意情て
男〻ゝお職さん今夜ハ二三度ゝて見ゝぶゐの恋〻ゝ

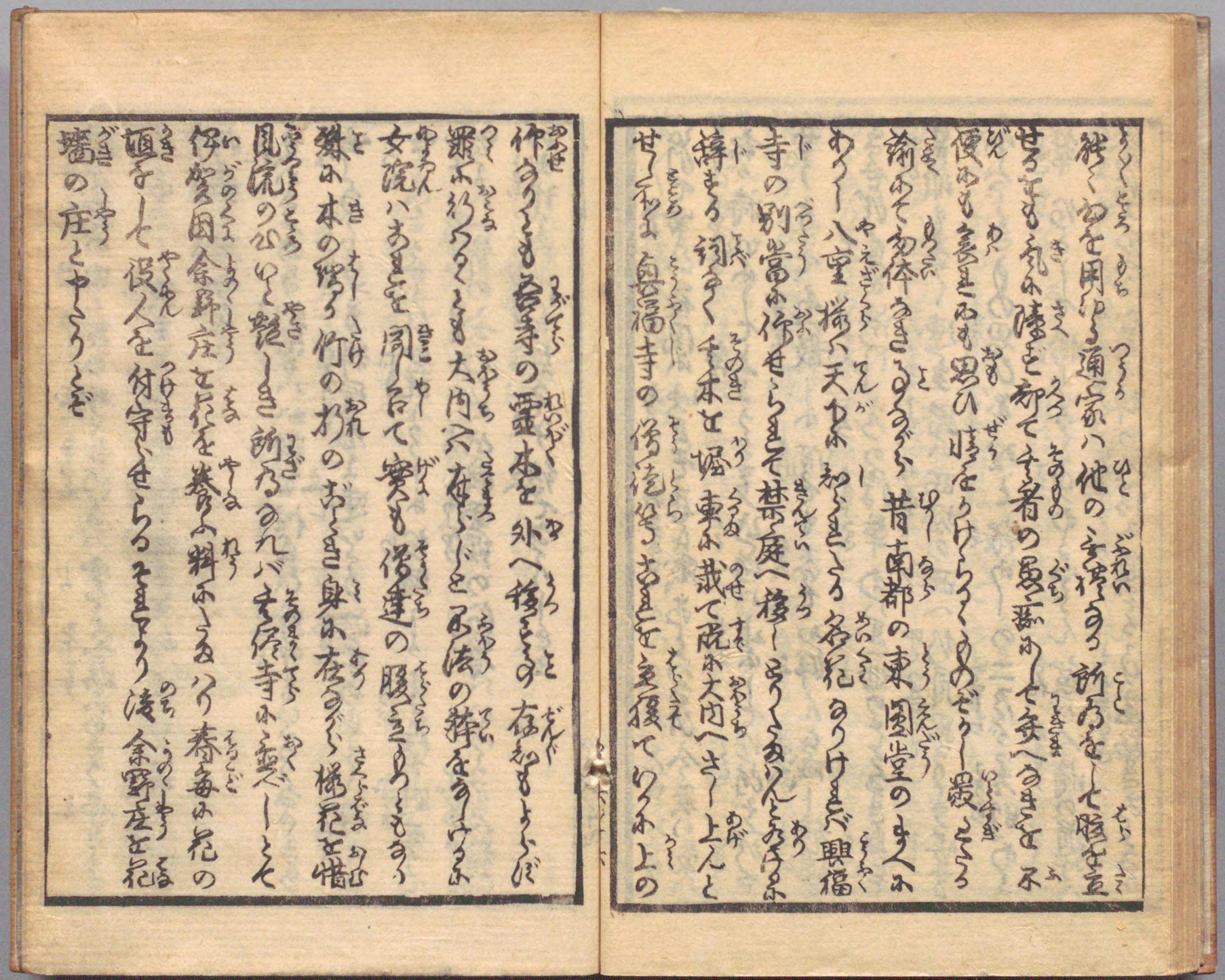
国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

あるとうひ故義家も行房をして狐の化さまとさとうで
ありしこのサ　ヤ　且はさるぬでおぢるまでの人今香もお
宮へどぞるまでのふ　お尋ねを成て　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ
力体なへ程めつぐなへ存知まで　男へイヤあぢこりの遊成ら
知らるひが宮めて怒襟　所乃ぐらふと　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ
信如サ名保　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ
了ぬるるふ手理ふ私が世話をして上板とも言はまひ
サ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ

別て宮ひ夜風ふ吹まそ居成あるふひ今我の勇ハ
私が持ゆふしてよるるふ多仕所ハ止ふしてい所ぞへ行や
せうちして乳散しふ酒でも天そ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ
させびまを涙　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ
見非もるく連立路ハ西堀の西へ行月器りるる宮
と小ぐるきるの思ひ義理と張ゆ　の二乃ぶ差別ある
帯　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ　ヤ
奈伝ふるふ宮の輝の人情ふ通ぞるるひ基弥きあるる



繼ぎ目を用ひる通家ハ他の主人の所為をして脇を立
せるなれ共陸奥の者の愚鈍にて手本へ合まを不
便なる事思ひ時をうけらるゝものぞ〳〵愛ところ
論なく勿体なきるるぐら昔南都の東園堂のまへ
〳〵八重桜ハ天下ハ知るまじく名花なりけるに興福
寺の別當ハ作せらるまで禁庭へ移〳〵ありんとあけ
時まる切手く手本に堀東ハ裁て所ハ大内へさ〳〵上んと
せるに興福寺の僧徒ハ奪ハ上の

作りるも寺の霊本を外へ移さるの存ものなれば
罪ハ行ひるくるも大内ハ存じ法の禁をうけるハ
女院ハあまを同名て寵も僧達の腹をもうる
禁ハ木の繋り何の打のおき身ハ存るのぐら桜花を惜
見流のひ〳〵惜しき所なるのれバ寺ハ霊〳〵
伊勢国余野庄を行を養ハ料ハ春毎ハ花の
頃ハ役人を付守せらるそまるり法余野庄を花
墻の庄とやうるぞ

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

彼女院の男子の如く勾引のゝバ実に人情ふかう屋さうる
人くのゝべー我身を忘れて他の痛さを知らぬ清ダ人情よ
行感る早合点なり
文ハさてあき彼男ハか職を作るひ途中もいろ〳〵さら
幽〳〵ぐらい又も料理屋より連のうり以来のぶ〳〵種〳〵ふ
実〳〵をうらゝい口説ようしふ仮時しっ手を逃さうて
野〳〵ハ一旨の分わりて仕度西瓜の分男ハいろ〳〵不及殺故
の土産ハ傍を見るゝ終てうう〳〵

是此一冊ハ初編ようあるまでの後下ゝ新
作趣向をたぐりつけるゝ作ふ男ひのんが然ハあらゝ直
さる十三回十四回をよく〳〵ゝ人べ実ハ左様ふてわるる
と思ひ合せるゝつぎ物語ふてゝ知らせるべ

同房新話以登家内喜巻之六了

門人 春江
春笑 校合

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

江戸　狂訓亭　爲永春水戯作

江戸　一筆庵　渓齋英泉画圖

春曙八幡佳年拾遺辰巳乃梅　全本十二冊　爲永作　出來

河野名臣十八森　全本二十五冊　爲永春水作　出來近刻

書物小説問屋　江戸馬喰町四丁目　金幸堂　菊屋幸三郎販

清涼香

紅袋入　七十二銅

清涼殿ハ暑を去らんため樓ハ清涼寺ハんすゞしき所なるべし。抑ハ清涼香の文字を其まゝすゞし香と唱へ樂屋婦人の衣通姫の湯あゞり紅藤清水の名を[illegible]し。其香繁りて[illegible]ハ番繁りて[illegible]あるて唐ようさくと[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]よう

[illegible]

切紙

[illegible]

○奥のあまに一切あり〜○[illegible]の痕と
いやす○あせもふき〜○小児ふとりて[illegible]
たるふ〜〜○男女もれたるもの[illegible]
[illegible]○毒虫のさしたるハ[illegible]
○蚤虱ひのへ床の下ハ[illegible]○往来あれバ掛帯の代
[illegible]

調合所　金幸堂　書林　江戸馬喰町四丁目　菊屋幸三郎

金幸堂藏版中形繪入讀本類標目

春曉八幡佳年　全十八冊　為永春水作　歌川國直画
處女教訓黄金菊　全十冊　全作　全画
洞房新話糸柳　全九冊　全　香蝶樓國貞画
春宵多佳年廼花　全十冊　松亭金水作　歌川國直画
春色初日の出　全十冊　為永春雅作　靜齋英一画
浮世酒屋喜兵上戸　毎編三冊ヅヽ　東里山人作　國直画
松竹梅けいらん屋　全十五冊　三亭春馬作　香蝶樓國貞画

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

208
12
686

假名手本籌の梅　全九冊　山東京傳作　歌川豊國画

見振声色あゝむ石　全五冊　式亭三馬作　歌川豊國画

あて七癖四十八癖

客者評判記　全三冊　式亭三馬作　歌川國貞画

玉子詣膝栗毛　十返舍一九作　全二冊

滑稽水滸傳　一編　三冊　十返舍一九作　全一冊

哦ヒ乃藏入　一九作　全一冊

哦ヒ乃突出　一九作　全一冊

洛嘶弥次郎口　一九作　全一冊

繪本武勇錦　十返舍一九作

繪本五大力　市川團十郎作

繪本玉茗物語　同　全一冊　作

繪本稲妻草紙　唐立作

繪本小夜衣草紙　同　全一冊　作

繪本八幡祭　一九作

生花秘傳圖式　全四冊　初編　後編

遠州流挿花意匠　巻面一枚摺

幸壽年代記

三都書林

京寺町通二条下ル所　山城屋佐兵衛

同　御光寺角　柱村長江郎

大坂鰻谷通南ノ筋町　大野木市兵衛

同　博労町角　河内屋茂兵衛

江戸馬喰町二丁目　蔦屋重三郎

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

208
12
686

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用